

復帰後の沖縄

昭和47年（1972年）沖縄の日本復帰後は、本土との経済格差解消のため沖縄経済振興計画が10年ごとに策定されてきました。

昭和50年（1975年）には沖縄国際海洋博覧会（海洋博）、昭和62年（1987年）には第42回国民体育大会（海邦国体）、平成12年（2000年）には第26回主要国首脳会議（沖縄サミット）が開催され、これらと同時に経済発展の基盤である公共インフラも本土並みに整備されて、めざましい戦後の復興を遂げてきました。

そして、平成24年（2012年）からは第5次振興計画（アジアの活力取り込む空港・貨物ハブ整備、各市町村の企画立案など、沖縄の経済自立の10年）がスタートしています。

さらに、平成26年（2014年）7月沖縄タイムスによると、米映画テーマパーク、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンが、名護市に新たなテーマパークの開設を検討していることを明らかにしました。ネオパークオキナワ（名護自然動植物公園）と周辺地を合わせた30ヘクタール程度の土地が有力とみられています。



サミット（G8首脳会議）が開催された万国津梁館 しんりょうかん



サミット会場は沖縄県名護市にあり、東シナ海に面する沖縄県立のリゾートコンベンション施設です。
昭和60年（2005年）撮影



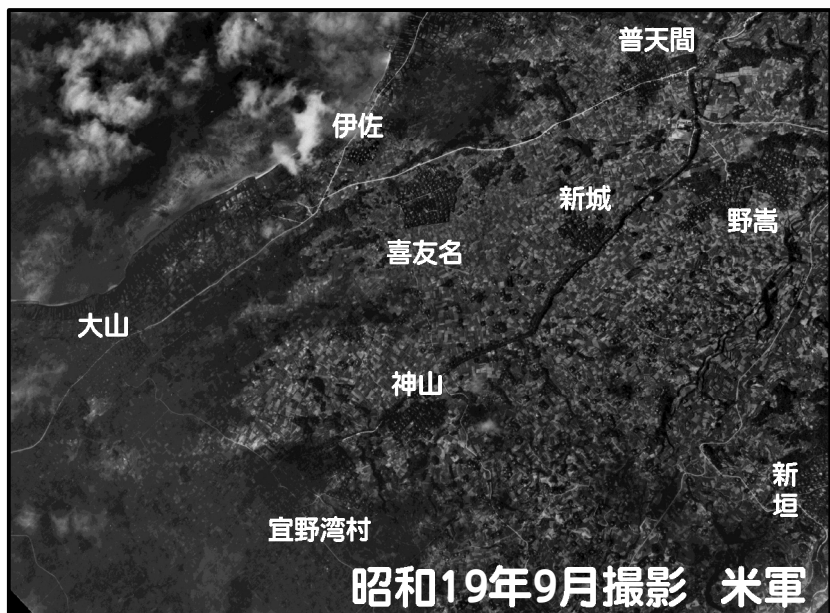
海洋博の終了後、国頭郡本部町の広大な跡地は国営沖縄海洋博覧会記念公園となりました。昭和52年（1977年）撮影

沖縄の復帰時と現在の状況

分野・事項		沖縄県		(参考) 全国	
		1972年(昭和47年)	2013年(平成25年)	1972年(昭和47年)	2013年(平成25年)
人 口 ・ 労 働	人口	97万人	142万人	1億760万人	1億2730万人
	世帯数 ^{※1}	21万世帯	52万世帯	2707万世帯	5104万世帯
	1世帯当たり人数 ^{※1}	4.32	2.63	3.69	2.42
	合計特殊出生率	2.88	1.90	2.14	1.41
	15歳未満	33.4%	17.6%	24.2%	12.9%
	人口割合 15～64歳	59.6%	64.0%	66.5%	62.1%
	65歳以上	7.0%	18.4%	7.3%	25.1%
	平均寿命	72.15歳	79.40歳	70.50歳	79.94歳
	労働力人口 ^{※2}	78.96歳	87.02歳	75.94歳	86.41歳
	完全失業率	3.5%	5.7%	1.3%	4.0%
	就業率 ^{※3}	54.0%	55.1%	63.8%	56.9%
家 計	産業別就業者数 ^{※4}				
	第1次産業	6万1千人(16.9%)	3万人(4.8%)	705万人(13.4%)	233万人(3.7%)
	第2次産業	7万6千人(21.1%)	10万人(15.0%)	1923万人(36.6%)	1541万人(24.8%)
	第3次産業	22万4千人(62.0%)	50万人(79.4%)	2619万人(49.9%)	4445万人(71.5%)
	世帯の消費支出(月額)	93,512円	253,998円	116,992円	318,707円
	世帯の収入(月額)	128,621円	387,089円	165,860円	523,736円
	エンゲル係数	33.8%	23.3%	30.1%	22.2%

平成26年度総務省統計局資料

写真で見る普天間基地の変遷



近年、米軍のオスプレイの配備でも話題になっている普天間飛行場の移り変わりをしてみましょう。

左の写真は、昭和19年(1944年)9月に米軍によって撮影されたものです。飛行場はありません。

この撮影の10日余り後の10月10日に米軍の沖縄大空襲がありました。

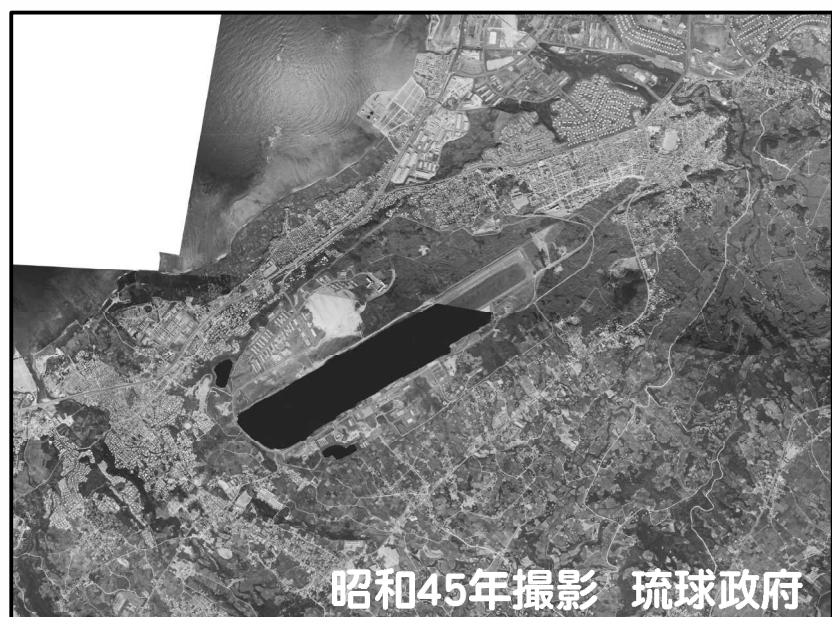


20万分1地勢図「那覇」縮小



終戦の3カ月後に撮影された写真です。すでに飛行場の滑走路や駐機場ができ、周辺では基地の建設が始まっています。

基地内の一般住宅は、すべて基地の外側に移動したのでしょうか。



昭和45年(1970年)に琉球政府が撮影した写真です。中央には米軍の普天間飛行場があります。また、写真の上部には、米軍の基地と住宅地が見て取れます。一般の住宅地は、道路沿いに密集しているのがわかります。

米軍の重要な施設は、一般にわからないように黒く塗られています。



現在の普天間飛行場と周辺です。飛行場を囲むように一般の住宅が密集しています。写真の上部にも、まだ、米軍基地や住宅地があります。この北側5Km 先には、嘉手納基地があります。



消えた沖縄の鉄道

かつて、沖縄本島的那覇を中心に複数の鉄道が走っていました。那覇を中心に鉄道を敷く動きは、県外の資本家などが明治中頃からありましたが、資金調達ができず実現することはありませんでした。

明治末期に、県営による沖縄県鉄道 与那原線（那覇－与那原間）の計画が進められ、那覇市内の路面車両（軽便鉄道）として大正3年（1914年）12月に開業しました。また、同年4月には民間の沖縄電気（電気軌道）大門前－首里間も開通していました。

沖縄県鉄道の車両（軽便鉄道）の運行区間は、後に古場蔵－嘉手納間、国場－糸満間が開通し、合わせて3系統になりました。嘉手納線や糸満線の列車も与那原線に乗り入れて、那覇駅発着としていました。

動力は蒸気機関・内燃機関が併用され、このうち半数近くは内燃機関の気動車（ガソリンカー）による運転でした。

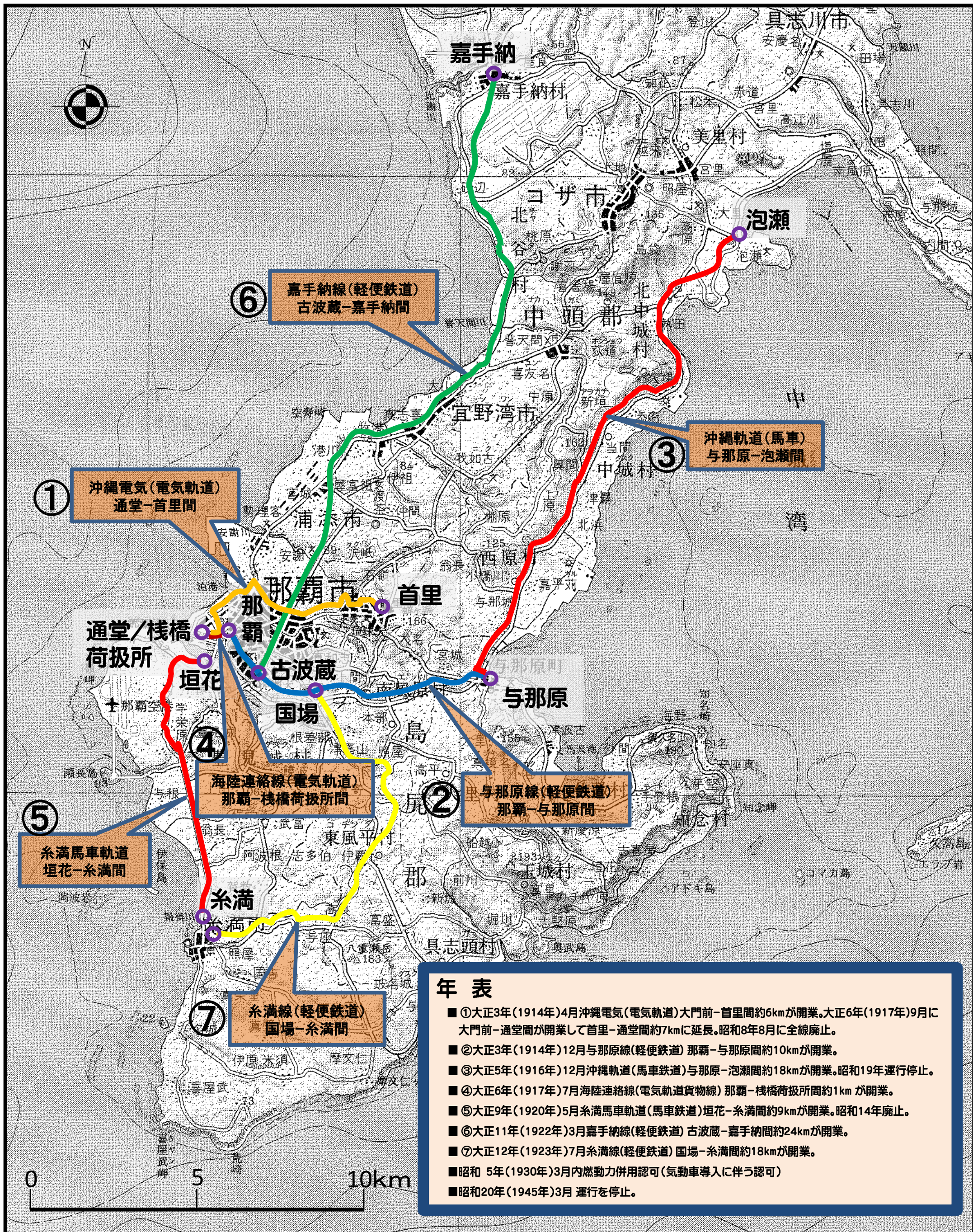
また、民間鉄道の馬車軌道も走っており、大正5年（1916年）には沖縄軌道（与那原－泡瀬間）が開業し、大正9年（1920年）には糸満馬車軌道（垣花－糸満間）が開業しました。

太平洋戦争の末期になると軍事輸送が本格化し、昭和19年（1944年）7月には通常ダイヤによる営業運転を終了して実質的には軍用鉄道となりました。昭和20年（1945年）3月には戦争の激化で完全に運行を停止し、その後の連合国軍上陸によって鉄道施設は全て破壊されました。

※ 軽便鉄道（けいべんてつどう）とは、一般的な鉄道よりも規格が低く、安価に建設された鉄道です。沖縄県鉄道（軽便鉄道）の軌間（鉄道のレールの左右頭部の内側の幅）は762mmを採用しましたが、国際的には1,435mmが標準です。日本においては、圧倒的に1,067mmが占めています。

※ 馬車軌道とは馬車鉄道のこと、馬が線路の上を走る車を引く鉄道です。

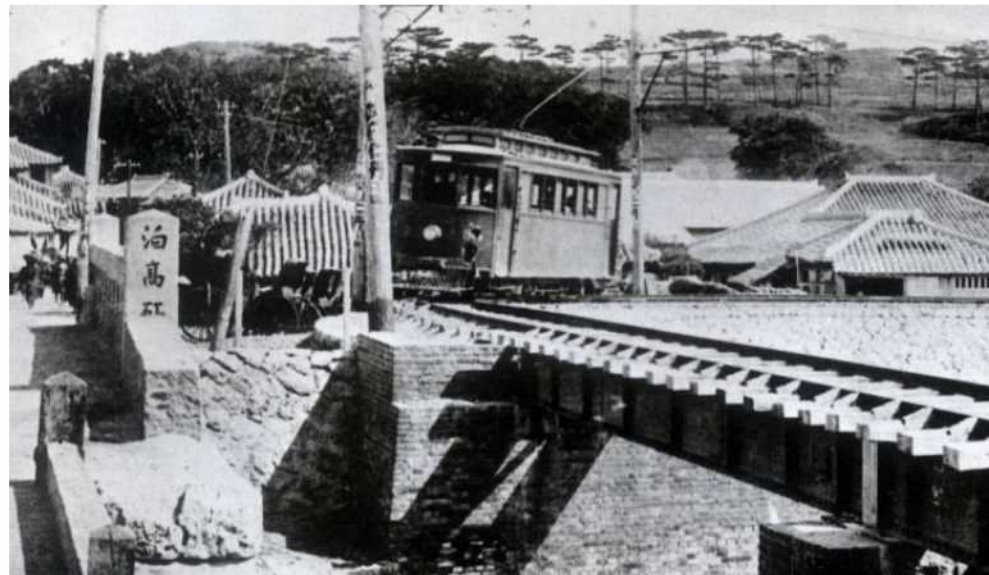
消えた沖縄の鉄道



沖縄の鉄道風景写真



沖縄県営鉄道 嘉手納線(嘉手納駅)



首里琉染提供那覇市歴史博物館所蔵

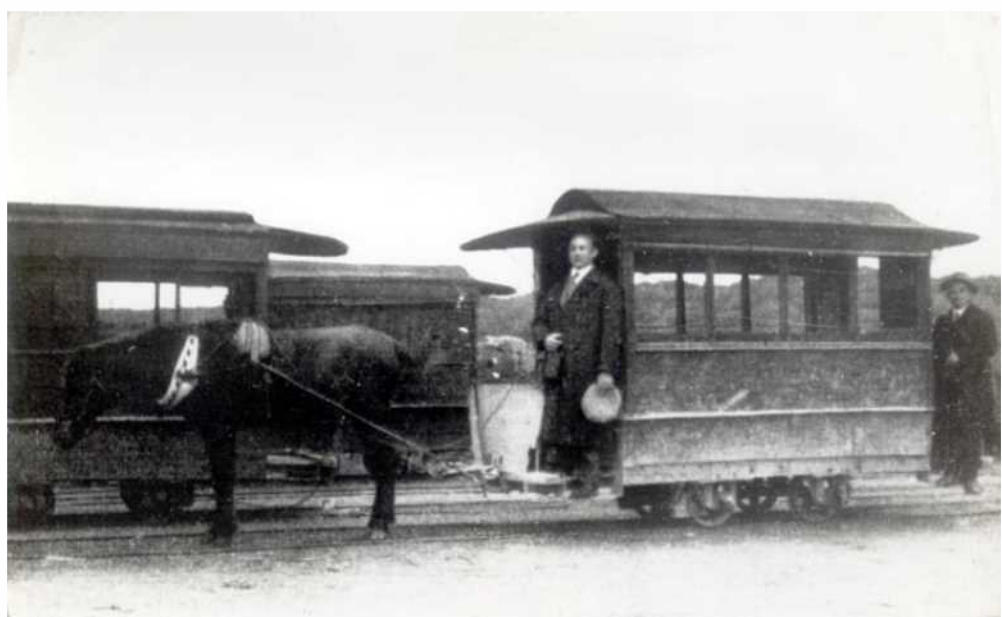
沖縄電気 電気軌道路面電車(泊高橋付近)



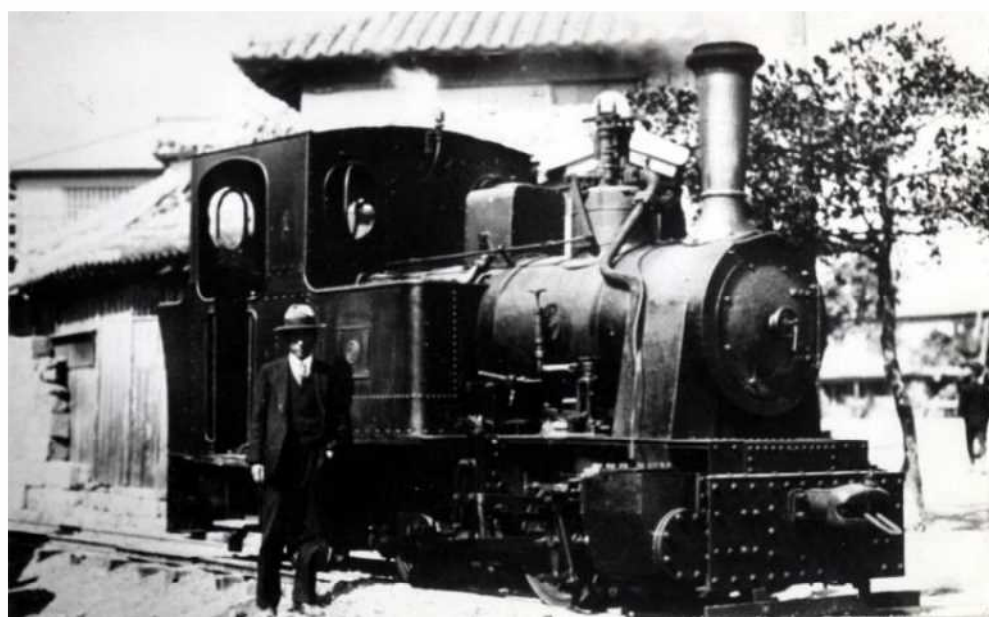
那覇駅前の風景(1934年)



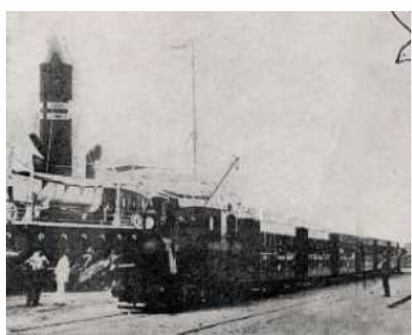
那覇駅、昭和初期頃、左方は事務室、
右方が待合室。



垣花(那覇)・糸満間を走った馬車軌道(1918年)



軽便機関車



那覇(交通)／鉄道と船
(1916年頃)



那覇／軽便鉄道(戦後)



爆撃を受けた軽便機関車(戦中)

資料提供：那覇市歴史博物館

せんか くぐ め と もり いしぼりうふ じ し 戦火を潜り抜けた富盛の石彫大獅子



那覇市歴史博物館提供
写真は、米軍兵が大獅子を
たて盾に八重瀬岳の日本軍を
うかがうか
窺っている様子です。



大獅子のまわりは、公園に整
備され、戦火が無かったよ
うに立っています。

この大獅子は、高さ 141.2cm、全長 175.8cm あり、火除けとして 1689 年に
あんち
安置された沖縄最古で最大のシーサーです。大獅子は八重瀬岳の方向を向い
て設置されています。

今も沖縄戦での無数の弾痕^{だんこん}が見られます。

※設置の由来

昔、富盛村では不審火が多く、困り果てた住民が風水^{ふうすい}で占^{うらな}って貰^{もら}ったところ
八重瀬岳が原因とわかりました。その対処法^{たいしよ}として、山に向かって建てるよう
にと言われて設置したと伝えられています。

八重瀬町観光HPより

B円＝B型軍票

B円(ビーえん)とは、連合国の共通軍票で、米軍が発行していました。昭和20年(1945年)から昭和33年(1958年)までの13年間は、米軍占領下の沖縄県や鹿児島県奄美群島(トカラ列島含む)で通貨として流通しました。また、硬貨は無く全て紙幣でした。

昭和20年(1945年)の敗戦直後、本土においても占領軍によってB円が日本円と同じく正式な通貨とされ、短期間少量ではありますが流通しました。日本政府が占領経費を日本円で支弁することを交換条件として、軍票支払の停止を要請したことが承認され、本格的な本土での流通はありませんでした。

沖縄で使われた軍票にはA円とB円の2種類が存在します。その違いは流通場所でした。

A円は昭和21年(1946年)7月～9月の3ヶ月間発行されたもので、米軍基地内のみで使用され、外部への持ち出しは禁止されていました。

ドル切替えについて

昭和33(1958年)9月16日から昭和47年(1972年)までの14年間は、USドル通貨に切り替わりました。米国占領下の沖縄ではB円からドルへの通貨交換が実施され、高等弁務官布令第14号「通貨」にもとづき、流通したB型軍票を廃止し、米国ドルを琉球列島における法定通貨にするというものでした。



サイズ

千円券	66 mm × 155 mm
百円券	66 mm × 155 mm
式拾円券	66 mm × 155 mm
拾円券	66 mm × 112 mm
五円券	66 mm × 112 mm
壹円券	66 mm × 78 mm
五拾銭券	66 mm × 78 mm
拾銭券	66 mm × 78 mm

出展: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』